

「やさしい日本語」が使われるようになったのはいつ頃からでしょうか。

庵 「やさしい日本語」が誕生するきっかけとなったのは、1995年に発生した阪神・淡路大震災です。死者6000人を超える大災害でしたが、数多くの外国人も被災しました。日本語と英語、中国後、韓国語・朝鮮語以外の情報があまく流れず、多くの外国人が不利益を被りました。こうした状況を改善するため社会言語学者やNHKのアナウンサーらの共同で、災害などの緊急時に、かなり単純化された日本語で必要な情報を伝える方策が研究されました。これが専門用語として「やさしい日本語」が使われた最初の事例で



Profile

いおり・いさお

1967年、大阪府生まれ。大阪大学大学院文学研究科博士課程修了。大阪大学助手、一橋大学講師、准教授を経て、現在同大学国際教育交流センター教授。専攻は日本語教育、日本語学。著書に『新しい日本語教育(第2版)』(スリーエーネットワーク)、『やさしい日本語——多文化共生社会へ』(岩波書店)などがある。

Interview

一橋大学 国際教育交流センター 教授 庵 功雄

# 「やさしい日本語」として注目集める

すでに外国人抜きでは成り立たない国になった日本。多文化共生社会の入り口にさしかかったいま、日本語が不得意な人との共通言語として「やさしい日本語」に注目が集まっている。一橋大学の庵功雄教授に、その概要や歴史的経緯、日本語を母語にする話者にもたらすメリットなどについて聞いた。

うに書き換えます。

入れるものを持つて中央公園にきてください。

この文であれば、初級クラスの日本語を学んでいる人であれば誰でも理解できるでしょう。必要な情報に絞り、難しい熟語を使わず、簡単な日本語を意識的に使うことで、日本語能力がまだ十分に高くない人にとって理解しやすい日本語になります。これが「やさしい日本語」です。



—— いちいち書き換えるよりも、英語を併記すれば済む話ではないですか。

庵 定住目的で暮らしている外国人を対象にして国立国語研究所が行った全国調査の結果が有名です。例えば広島市のデータを見ると、「あなたが母語以外で分かる言葉はなんですか」という設問に対し、日本語と答えた調査対象者は70・8%だったのに対し、英語と回答した割合は36・8%にとどまりました。この傾向は全国平均でも変わらず、「日本語だったらなんと分かるが、英語は全然分からない」人たちが大半を占めているということです。

このように外国人だったら取りあえず英語が分かるだろうというのは完全な思い込みで、英語は共通語にはなり得ません。外国人が日本語の話者に日本語で話しかけているのに、英語で返答されるという冗談のような体験を数多くの外国人がしています。コミュニケーションの機会があるときにはまず日本語で話しかけてみる姿勢が必要です。特に相手が日本語で話しているときは絶対に日本語で返答すべきです。何度かやりとりをして全く日本語が理解できない

ときに、はじめて英語で話しかけてみるのがよいでしょう。日本では地図表示や道路の指示看板などで、英語話者に意味が通じないでたらめな「和製英語」が使われていることが少なくありません。日本人は英語が得意ではないと言われますが、得意でないのなら、なおさら日本語で対応すべきだと思います。

—— 英語が共通言語にはなり得ないということは分かりました。ではテクノロジーを利用して多言語対応を積極的に進める方向はどうでしょう。

庵 多言語対応はもちろん必要です。特に災害のときなどは外国人にとって大いに助けになると思えます。しかしそれにも限界があります。できるだけ多くの言語で情報を提供しようとすると、国内では約100の言語をカバーする必要があるので。もちろんすべての言語を提供する必要はありませんが、コストの問題などを考えるとその言語を話す外国人登録者の数が多い順番にどこかで線引きしなければなりません。上位何位までと機械的にルールを設けると、必ずそこからまれる言語がでてきてしまうという問題が生

す。それとは別に、私が代表を務める研究グループでは2010年から、災害時だけではなく、平時において外国人に対して情報提供をする際の日本語のあり方について研究してきました。具体的には地方自治体が提供している公的文书を外国人でも理解できるように「やさしい日本語」に書き直す作業です。

—— 具体的にはどのような文章が「やさしい日本語」なのでしょう。

庵 日本語を母語とする人たちが通常使用する文章を書き換えたものを見ると分かりやすいと思います。例えば、私が直接目にしたわけではありませんが、阪神・淡路大震災時に自治体が公園に次のような掲示をしたそうです。

容器をご持参の上、中央公園にご参集ください。

水や食料を配布するにあたっての注意書きですが、日本語が十分に理解できない外国人、とりわけ非漢字圏の人たちにとってほとんど意味不明な文だということは容易に想像できます。この状況はたとえ「ようき」や「さんしゅつ」とふりがなをふったとしても変わりません。そこでこの文を次のよ

じます。

—— 将来的には機械翻訳の技術が向上することでこの問題はクリアされるのではないのでしょうか。

庵 確かに機械翻訳でスムーズに翻訳が自動化できるのであれば100言語すべてで情報を提供するという考え方は正しいでしょう。言語数が増えればコストは高くなるからとコストはそんなに変わらないからです。しかし多額の研究費が積み込まれている日本語と英語の間の翻訳においても、そのまま実用化に耐え得る水準に達していないのが現状です。つまり結局は人手に頼らざるをえない。

しかし人手を前提とした多言語対応を実施するとすれば、訳せる人がいる地域とない地域で差が生じてしまうことになりました。こうした人材に偏りがあるため、むしろ公平性を損なう可能性があるのです。このような事情から、日本語自体を公共の言葉として積極的に使ったほうが公平性を担保しやすいのではという意見が多くなっています。

理解してもらおう努力が必要

—— では「やさしい日本語」に書き換えるコツは何でしょうか。



庵 文を短くする、主語を省略しないなどの方法論はありますが、何より言いたいことをはっきり絞って話すということが大切です。外国人からすると日本語の話し言葉は、「けど」「思ったら」「なんで」といった言葉で永遠につながって終わりがどこなのか分かってにくい。文を短くして言いたいことを簡潔に言っはつきり文章を切ったほうがいいです。

またこれから何を伝えるのかといったん頭の中で整理してから話すことも大切です。そうすれば、話すときにも単語を順序よく並べることができま。

一方書き言葉で重要なのは、あらかじめ分量を明確にすることで。例えば公的文書をやさしい日本語に書き換える横浜市との協働プロジェクトで一番効果があったのは、「情報は必ずA4紙1枚にまとめる」という決まり事でした。こうした外的制約をかけることで、おのずと行数、字数が決まり、本来に伝えたいことを分かりやすく表現するスキルが身につきます。

——書き換えの規則よりも、コミュニケーションをとろうとする日本語者の姿勢がより重要だということですね。

るからです。

しかし果たして、定型的なビジネスレターの飾り文句が事業の運営にとつて必要不可欠なのかどうかはよく考える必要があります。日本企業が外国人材に要求する日本語力のハードルを下げ、ごく普通の話し方で話すことができ、ごく普通の日本語でメールのやりとりができればよいと考えをあらためたほうがいいと思います。知識や技術は採用後にいくらでも教えることができます。ビジネス上必要な難しい日本語で本当に必要なものであれば、仕事を覚えていく過程で学んでいけばいい。これは日本人の新人社員の場合も同じだと思います。中小企業を含め現在人手不足で産業界は大変な状況ですが、採用する側の発想を少し変えるだけで、日本人より優

庵 そもそも相手に理解してもらおうと思っ話すことが大前提です。「分かりましたか」などというかけながら、相手が理解しているかどうか確認しながら会話を進めてください。そして理解できていない場合は、より簡単な言い方で言い換えてみる必要があります。ただ一方的に言いたいことを話すのは不適切です。さらに言えば、「やさしい日本語」は日本人と外国人のためだけのものではありません。日本語を母語とする私たちが、より日本語能力を高めるためのチャンスでもあるのです。

——ネイティブスピーカーの私た



秀な人材を獲得できるチャンスが広がっていることに経営者は早く気づくべきです。

——正しい日本語が失われてしまふという意見もありますか……。

庵 「簡単にしすぎては日本語が墮落する」などと言う人がいますが、小説などで使う芸術表現と日常で使う日本語は別に考えるべき

ちも日本語能力を高める必要があると。

庵 私は日本語を母語としている話者にとつて必要な日本語能力とは、「自分が知っていることや考えていることを伝えて、相手を自分の意見に同意させること」だと考えています。この能力は例えば私たちのような研究者であれば論文を学会で発表しその理論を多くの人に納得してもらうためのスキルです。企業活動でも同じでしょう。商談やプレゼンで「わが社の製品は素晴らしいですよ」といくら言っても、相手が賛同しなければ実際の取引には結びつきません。ところが概して日本人は、ディベートの訓練を幼少期から積んでいる欧米人に比べ、こうしたコミュニケーションが下手だと言われており、事実そうだと思います。しかし「やさしい日本語」を通じて、外国人と対話することによって、こうした欠点を克服できるようになる可能性があるのです。

——日本語が不得意な人をなんとか説得させることによって自らの能力も高まるということですね。

庵 はい。相手の反応を常に配慮し、伝えたいことを理解してもらおうと努力することで、自然に相

です。通常の生活やコミュニケーションで説明したり指示したりする場合には、言葉は論理的に筋が通っていて分かりやすく、読みやすいことが何より重要です。そのことに関係のない要素はほとんど省いていくべきで、日本語を母語とする話者にとつても、日本語をより論理的に使いこなすことにながっていくと思います。そもそも言葉は生き物と同じで、大多数の人に使われない言葉が生産性を失っていくのはやむを得ません。読めない／書けない漢字は結局必要がないのです。定型的なビジネスレターの文句などが日本語の表現力向上や論理性の向上に役立つことはないでしょう。

——誰にでも分かりやすい日本語を使うために普段から気をつけることはありますか。

手が聞き取りやすいようにスピードを落としたり、文章を短く切っ話したりするようになります。一方的に言いたいことをぶつけるのではなく、相手を常に配慮し、対等な立場同士の人間が一生懸命対話をするを通じて、つまり「やさしい日本語」を使う経験を積み重ねることで、コミュニケーションによって相手を説得できるような日本語能力の向上が期待できるのです。

### 日本語力≠能力ではない

——企業経営者にとつて必要な構成は？

庵 外国人材に求める日本語能力の水準を再考すべきだと思います。例えば私が勤務している一橋大学でも海外からの留学生が日本で就活するケースが増えてきています。が、母国語に加え英語、さらに日本語も上級クラスの学生がどんどん落とされてしまふ。それは結局いまだにネイティブ並みに日本語が使えることを採用基準にしている会社が多いからです。これは非常にもつたない。なぜなら英語圏のみならず世界中のさまざまな文化圏とつながっている優秀な人材をみすみす捨てていることにな

庵 手で書くことができない漢字は使わない、意味が難しい漢語の代わりに別の単語を使ってみる、カタカナ語や英語で意味が合っているか自信のないものは使用しない——こうした姿勢をとり続けるだけでもかなり違ってくると思います。日本ではかつて、常用漢字の導入で日常的に使う漢字をある程度制限しましたが、パソコンの普及で簡単に漢字変換できる時代になり、難しい漢語や当て字をやたら使う人が増えてきました。これは、分かったようで分からない表現を作り出し、何を言おうとしているのか分からない文章が氾濫する要因の一つになっているのでよくありません。自分で責任がとれる言葉しか使わないという態度が望ましいと思います。

◎